

日本動物行動学会第 29 回大会
プログラム・講演要旨集

2010



会場

[沖縄県男女共同参画センター ているる]

〒900-0036 沖縄県那覇市西 3 丁目 11 番 1

2010 年 11 月 19 日 (金) ~ 21 日 (日)

Contents

大会案内	2-5
アクセスマップ	6
会場周辺図・懇親会場周辺図	7
会場案内	7-8
大会日程・昼食情報	9
公開シンポジウム	10
ラウンドテーブル	11-14
動物行動学 南の学校	15-16
映像紹介一覧	17
ポスター発表一覧 (前半)	18-22
ポスター発表一覧 (後半)	23-27
参加者名簿	28-34

大会案内

会期

2010年11月19日(金)～21日(日)

会場

沖縄県男女共同参画センター ているる
(〒900-0036 沖縄県那覇市西3丁目11番1号)

共催

琉球大学農学部 亜熱帯農林環境科学科 生態環境科学分野 (昆虫学研究室)

受付

- 19日は12:00から、20日と21日は9:00から開始します。
- 受付場所は会場入り口になります。
- 当日参加の方は受付にて大会参加費(一般7000円、学生6000円)を納入してください。
- 懇親会費につきましては、当日申し込みも受け付けます。会費は一般7000円、学生6000円です。

ポスター発表

- ポスターサイズは **A0版タテ(横841mm×縦1189mm)**でご準備下さい。パネル上部にはポスター番号を記載した紙(横148.5mm×縦105mm)を貼りますので、その分を空けて貼付下さい。
- ポスター会場は1階の展示コーナーとフィットネスルームです。
- 前半(19日昼～20日昼)と後半(20日昼～21日昼)のセッションに分かれます。
- ポスターの貼り替えは、20日のお昼休み(12:00～13:00)に行ってください。
- コアタイムを次の通り設けます。

19日 | 13:00～14:00, 17:00～18:00

20日 | 16:00～18:00

各コアタイムにはポスター前で発表できるよう、待機して下さい。

- ポスターを張り付けるための画鋏は事務局で用意しますが、他の文具が必要な方は各自でご用意ください。
- **ポスター賞(お願い)**: 大会セットに同封の投票用紙に最も優れていると思うポスター発表の番

号を記入し、21日の13時までに受け付けの投票箱に入れてください。

映像紹介

- 19日の14:00~16:00に3階B会場（研修室）にて行います。
- DVDのみが使用可能です。 画像のチェックを行うためのPCは設置しませんので、発表者の責任で事前にご確認下さい（19日の13:00~14:00に会場で試写可）。またPCのハードディスク内に記録されている映像につきましては、各自ノートPCを持参して、上映をおこなってください（Mac, Windows共に可）。
- 発表時間は、質疑応答3分を含めて15分です。

ラウンドテーブル

- 会期中、5件のラウンドテーブルが開かれます。
- 会場は1階の大ホール、2階の会議室（A会場）、3階の研修室（B会場）です。
- プロジェクターとスクリーンのみ用意しますので（大ホールはマイクも）、PCの設置と切り替え等は世話人と発表者の責任で行ってください。

公開シンポジウム

- 11月20日（土）の13:00から（開場12:30、終了16:00）
「動物行動学ってなに？ 島の生き物のふしぎ」を開催します。
- 場所は、1階大ホールで行います。参加登録されていない方もぜひ御来聴ください。

動物行動学南の学校

- 11月20日（土）の9:30（開場9:00、終了12:00）より、3階のB会場で行います。

懇親会

- 21日（日）16:00より、ロワジールホテル那覇（3階 天妃の間）で行います（～18:00終了）。

総会および学会賞表彰・記念講演

- 21日（日）13:00（～15:30終了）から大会会場大ホールにて開催します。会員の方はできるだけご参加ください。

休憩室

- 会場内3階、創作室と生活実習室に設けます。

- 19日（金）13:00～20:00, 20日（土）9:00～20:00, 21日（日）9:00～15:00まで利用可能です。

託児所

- 会場1階「こどもの部屋」に託児所を設けます。
- 利用時間は19日（金）13:00～20:00, 20日（土）9:00～20:00, 21日（日）9:00～15:00の間です。
- **事前にメールにて利用申し込みをされた方のみ利用可能です。**
- 当日受付にて代金を確認し、お支払いください。

クローク

- 会場3階の和室に設けます。
- 利用時間は19日（金）13:00～20:30, 20日（土）9:00～20:30, 21日（日）9:00～12:00です。最終日は総会開始前に荷物をお受け取り下さい。

宿泊

- 大会事務局では宿泊の斡旋はしておりません。会場近辺の地図を参考にホテル等を各自予約してください。

那覇空港から大会会場（沖縄県男女協同参画センター ているる）までの交通の詳細

①モノレール+徒歩もしくはタクシーの場合

- 那覇空港からゆいレール（モノレール）で旭橋駅下車（10分・230円）,
- 海側（モノレール進行方向に向かって左）に約1km,（徒歩15分・0円）（タクシー5分・500円）。

②那覇空港よりタクシーを利用の場合

- 「運転免許センターの隣・沖縄県男女共同参画センターているる」までと指示して下さい（15分・約1000円）。

③モノレール+バス利用の場合

- 那覇空港からゆいレール（モノレール）で県庁前駅下車（12分・230円）, 乗り換え徒歩（1分）,

－パレットくもじ前から路線バス（那覇バス・市内線1, 2, 5, 15, 市外線45）に乗車, 三重城下車（5分・200円）.

④ 路線バスを利用の場合

－国内線旅客ターミナル前から那覇バス市外線25もしくは沖縄バス・琉球バス市外線120に乗車, 県庁北口で下車（10分・200円）, 乗り換え徒歩（1分）,

－パレットくもじ前から路線バス（那覇バス・市内線1, 2, 5, 15, 市外線45）に乗車, 三重城下車（5分・200円）.

懇親会会場（ロワジールホテル那覇）までの交通の詳細

－大会会場にいるより徒歩10分です. 専用バス等は運行しません.

その他のご注意

－駐車場は用意しておりませんので, 公共交通機関をご利用ください.

大会事務局（問い合わせ先）

琉球大学 農学部 亜熱帯農林環境科学科 生態環境科学分野

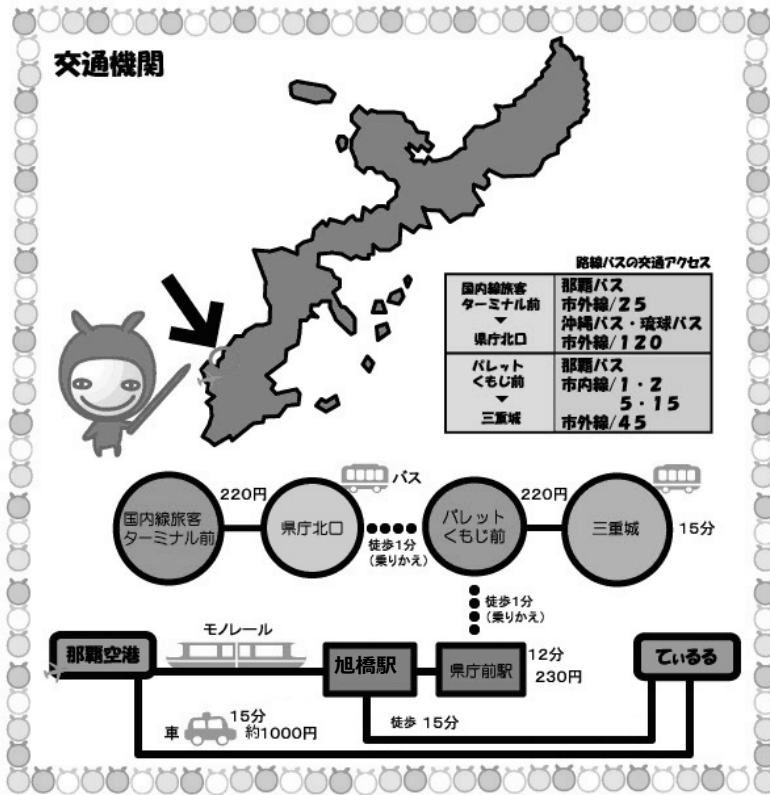
大会委員長 辻 和希（つじ かずき）

大会庶務 立田 晴記（たつた はるき）

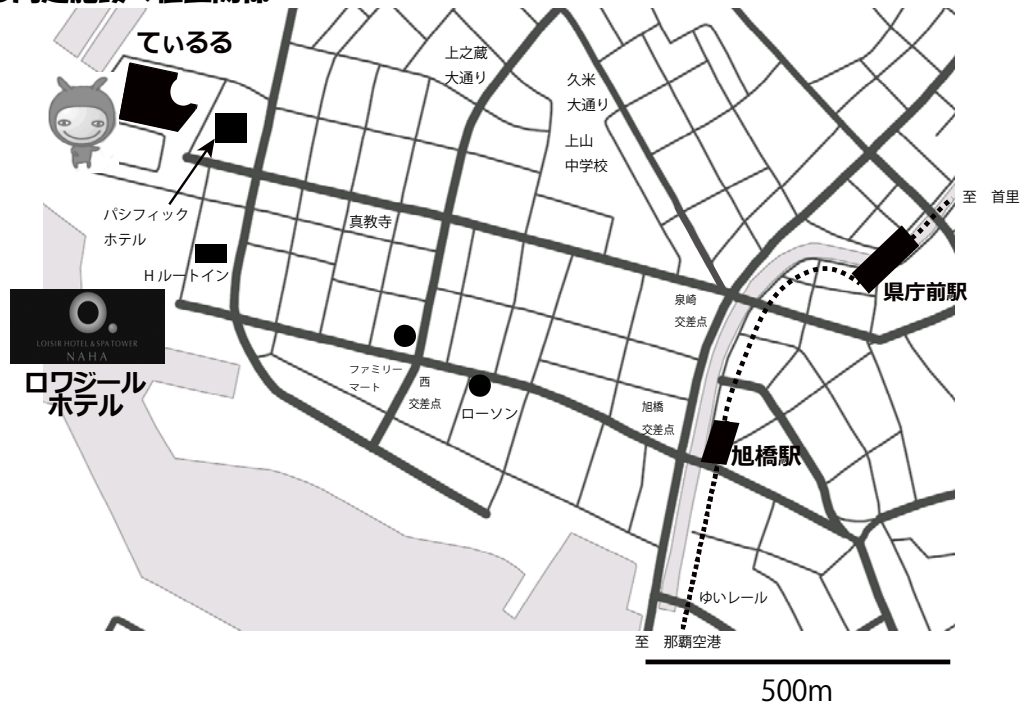
メール esj2010@w3.u-ryukyu.ac.jp

*大会期間中は会場3階の和室が大会事務局となります. 何かございましたらスタッフまでお尋ね下さい.

アクセスマップ



会場と周辺施設の位置関係

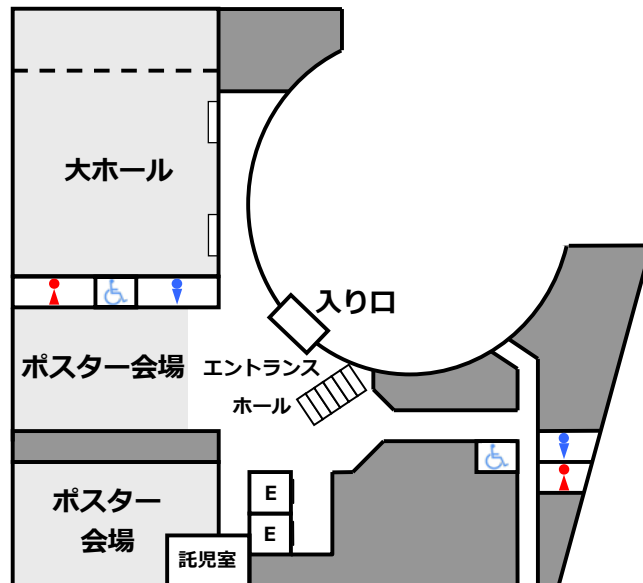


会場周辺地図

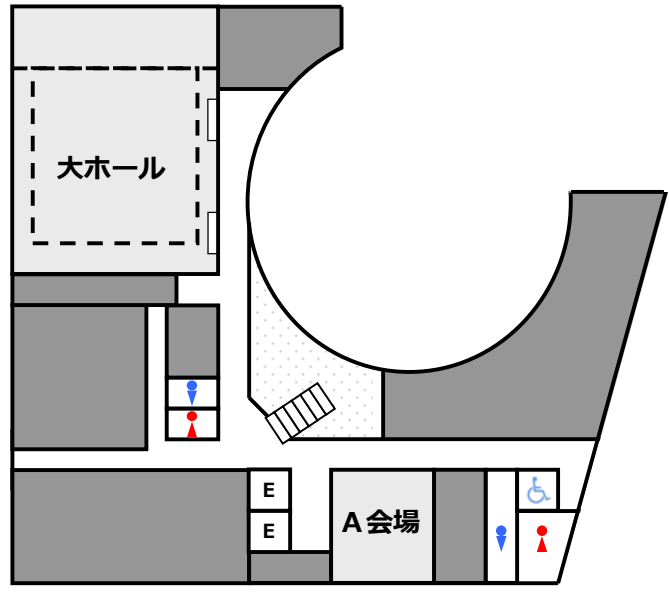


会場案内

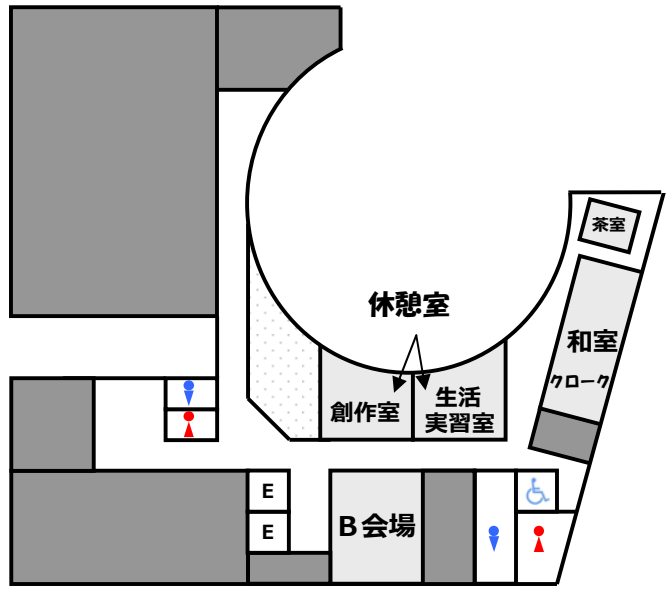
1F



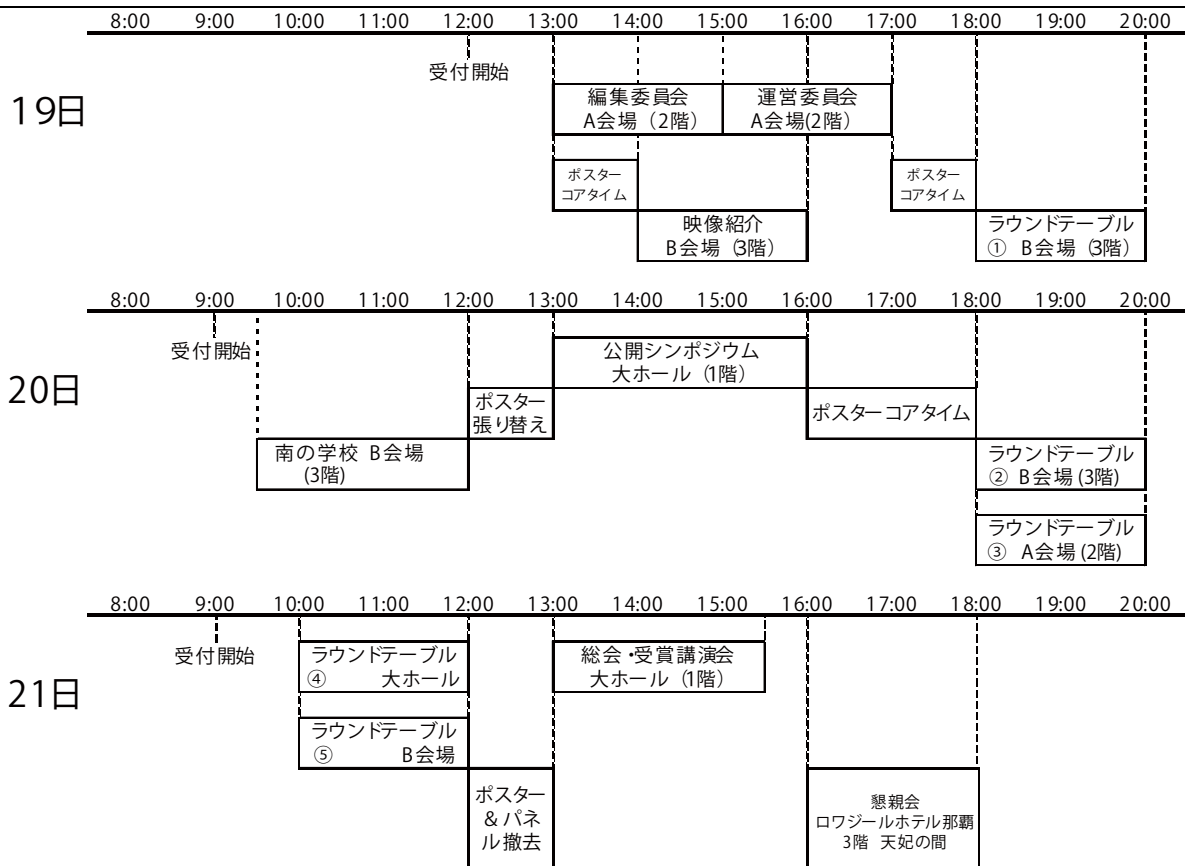
2F



3F



大会日程



昼食情報

- お弁当は 12:00 から受付にて引き渡しとなります。
- 事前予約され方のみになります。当日販売分はございません。御了承下さい。

公開シンポジウム

「動物行動学ってなに？ 島の生きもののふしぎ」

動物の面白さはその動きにあります。そんな動物行動に研究の焦点を当てた学会である日本動物行動学会 29 回大会がこのたび沖縄では初めて開催されます。生物多様性の宝庫である沖縄では、天然記念物などの珍種でなくても、身近にいるふつうの生き物が行動研究のこのうえない材料になっています。そこで沖縄の生物を材料に動物行動研究の第一線でさまざまな切り口から活躍されている皆さんを迎え公開シンポジウムを企画しました。この機会に一般市民の皆さんも「動物行動の科学」を楽しんでいただければと希望します。

場所 沖縄県男女参画センター ていりる 大ホール (1F)
日時 2010年11月20日(土曜日) 13:00~16:00 (開場 12:30)

講演者

「沖縄の野生化グッピー～外来種、でもすごい材料」

○狩野賢司・佐藤 綾 (東京学芸大学)

「派手なメスはオスにもてない?! シロオビアゲハのベイツ擬態の謎」

○畑野俊貴・辻 和希 (琉大・農)

「ナゲナワグモの狩りの秘密：糸、匂い、聴覚」

○宮下 直 (東大・農)・佐川弘之 (福島県)

「海の賢者の社会をのぞくーイカにみる私と貴方」

○池田 譲 (琉大・理)

「右利きのヘビと左巻きのカタツムリ」

○細 将貴 (東北大・生命科学)

「最新技術で探る“ウチナンチュ”」

○木村亮介 (琉大・亜熱帯島嶼科学超域研究推進機構)

申し込み不要です。「公開シンポジウム」には参加登録されていない方々も自由に入場できます。奮ってご参加下さい。

ラウンドテーブル

ラウンドテーブル①

精密計測が拓く、運動の法則性から行動の理解へ

企画者 林 叔克 東京農工大学大学院 工学研究院
細 将貴 東北大学大学院 生命科学研究科
中里研一 理化学研究所 基幹研究所

日時 11月19日 18:00~20:00

会場 B会場

近年、産学様々な分野で精密計測が普及してきている。これにより、物体の運動の時間空間的な変化を定量化し、隠れた意味を暴くことが可能になる。そのため、精密計測には動物行動学に躍進をもたらす可能性が大いに期待される。このとき注目すべき点のひとつは、生物の行動には運動と行動の2つの側面があることである。生物の行動は物体の運動である一方で、自然選択を受けたあとの進化の産物であるために適応的な意味をもつことが多い。そのため、無生物で成立する運動の法則がどこまで生物の行動で成立するのか、その境界を知ることによって、逆に生物らしさが浮かび上がってくる。このことは、生命現象における一般的な法則を解明することにつながるだろう。そこで本ラウンドテーブルでは、精密計測を通し、運動と行動の両方の視点を持つことで見えてくる世界を議論したい。

行動はどのように理解できるのか？ 異なる階層の示す「運動」の解析からの示唆

○堀部直人（東大・総合文化）・池上高志（東大・総合文化）・Martin Hanczyc（Univ. of Southern Denmark）・阿部真人（東大・総合文化）・嶋田正和（東大・総合文化）

揺らぎから、自発、そして、環境適応へ。ゾウリムシを題材に。

○林叔克（東京農工大・工学院）・菅原研（東北学院・人間情報）・早川美徳（東北大学・教育情報基盤センター）

線虫 *C. elegans* の温度走性における最適行動戦略

○中里研一・望月敦史（理研 ASI）・久原篤・森郁恵（名大生命）

捕食者による餌動物の見極め過程を分解する

○細将貴（東北大・生命科学）・林叔克（東京農大・工学院）

アリに見られる自己組織化機構とその制限要因

○菊地友則（琉球大学）・辻和希（琉球大学）

トゲオオハリアリが示す行動のリズム

○結城麻衣・菅原研（東北学院大学）・林叔克（東京農工大学）・菊地友則（琉球大学）・辻和希（琉球大学）

アリの運動の定量的解析--個別運動から集団採餌まで--

桐谷祐司, 荻原悠佑, 粟津暁紀, 西村信一郎, 前田一樹, 泉俊輔,

○西森拓（広島大理）・秋野順治（京都工繊大工芸）・中里研一（理研）

ラウンドテーブル②

性比研究の成功と今後の展開

企画者 安部 淳 (静岡大・農)

日時 11月20日 18:00~20:00

会場 B会場

雄と雌の子をどのような割合で産むべきかを考える性比調節の分野は、行動生態学の中で最も成功を収めてきた分野のひとつと言っても過言ではないだろう。理論研究による予測と実証研究によるデータが良く合う例として知られ、これらのインタラクションによって発展してきた。この分野が成功を収めてきた理由として、(1)適応度に直結する重要な形質であること、(2)単純なトレードオフ、(3)データの測定が容易であること、があげられる。この恵まれた金脈をさらに違った角度から掘り進めることで、新たなブレークスルーの開拓が期待される。しかし、どの方向に、どうやって掘り進めるのかが問題である。そこで、本ラウンドテーブルでは、これまでの性比研究の成功と行動生態学の中で果たしてきた役割についてまとめ、既存理論の再考、未解決問題の解明、関連分野との連携など、今後の発展可能性について考える。実証研究から理論研究まで、最新の知見を紹介することにより、更なる発展が期待される性比研究の展望について議論したい。

企画趣旨説明

○安部淳 (静岡大・農)

何で決める？何で決まる？-イチジクコバチの性比

○木下智章 (佐賀大・農)

アブラムシにおいて性比を偏らせる要因

○秋元信一 (北大院・農・昆虫体系)

研究間で見られる性比調節の揺らぎ~グッピーでの変動する性比調節を例として

○佐藤綾・狩野賢司 (東京学芸大学・連合学校教育学)

性比選択から考える「性の維持」問題：オスの対抗適応が性の維持に与える影響

○川津一隆 (京大院・農・昆虫生態)

ラウンドテーブル③

COOPERATION2: Synergy 襲来 -消滅するのは、群か、血縁か-

企画者 小林 和也 (北大・農・生物生態体系)

日時 11月20日 18:00~20:00

会場 A会場

従来、協同 (cooperation: 真社会性、協同繁殖、共生など) の進化においては、協力する個体間の血縁関係を利他者の適応度獲得の主要因と見なす血縁選択が重要視されており、単数倍数性の膜翅目の社会進化はこれにより説明されている。しかし近年、両倍数性の鳥類や哺乳類においては、単数倍数性生物に見られるメスから見た娘-姉妹間の血縁度不均衡が存在しないため、群形成そのものが利他者の適応度獲得にポジティブな効果 (Synergy) をもたないと協同が進化しないという議論がなされている。これに呼応するように、協同の進化の主要因について、血縁淘汰論者と群淘汰論者による激しい理論闘争が巻き起こっている。ところが、協同が「なぜ: Why」そして「どのように: How」進化してきたのかは理論ではなく事実の問題である。にもかかわらず明確な実証データがほとんど無いことが論争に拍車をかけている。このラウンドテーブルでは、これらの論争を踏まえ、有効な実証研究を行うために血縁度と群効果をどのように実証研究のための理論フレームに組み込めばよいか、という観点から理論バトルを

俯瞰、論点整理するとともに、両倍数性、単数倍数性生物の双方で最新の実証データによる血縁効果と群効果の検討結果を紹介し、協同の進化をどのように理解すればよいかについて議論を深めたい。

血縁選択は群の効果の夢を見るか？ -協同者の適応度獲得における血縁効果と群効果の意味-

小林和也・○長谷川英祐（北大院・農・生物生態体系）

協同繁殖鳥類における群れ効果と血縁効果

○江口和洋（九大院・理・生物科学）

群れぐらしのコハナバチ -なんで一人だとすぐ死んでしまうん？-

○八木議大・長谷川英祐（北大院・農・生物生態体系）

ラウンドテーブル④

Both Sides of Toshi（日高行動学の光と陰）

企画者 中嶋 康裕（日大・経済）

日時 11月21日 10:00~12:00

会場 大ホール

コメンテーター：長谷川寿一、工藤慎一、粕谷英一、桑村哲生

講演者と講演タイトル

“日高ガール”と呼ばれていた（らしい）日々を振り返って

○小汐千春（鳴門教育大・学校教育）

大学院生からみた指導教員としての日高さん

○森 貴久（帝京科学大・生命環境）

私にとっての日高先生：女性研究者育成と広報活動

○長谷川眞理子（総合研究大学院大）

リアクション学者だった日高敏隆

○中嶋康裕（日大・経済）

企画者の趣旨

本学会の主な設立者である日高敏隆さんが逝去されて1年が過ぎようとしている。わたしたち、直接・間接に指導を受けた世代の研究者は日高さんがどのような人であったのかをある程度追憶できる。しかし、若い世代の人にとっては、日高さんは既に「伝説の人」になっていて、たいへん有名であるにもかかわらず、行動学者として（あるいは研究指導者として）現役だった頃の話はまったく知らず、いったいどんな人だったんだろうかということに強く関心を持っている（ように思われる）。そこで、若い人たちに日高さんの実像を紹介することを第一の目的として、「日高敏隆とはこういう考えの人だった、こういう指導をした」ということを講演者がそれぞれの視点から（あまり褒めちぎらずに批判的な視点も交えて）紹介し、日高さんが日本の動物行動学に与えた影響の光と陰を検証したい。なお、複数のコメンテーターに登場していただいて、自由にコメントしていただく予定である。

ラウンドテーブル⑤

ママ、僕本当はママの子じゃないの？

-雌雄が遺伝的に分化した ウメマツアリの奇妙な生物学-

企画者 長谷川 英祐 (北大・農・生物生態体系)

日時 11月21日 10:00~12:00

会場 B会場

ウメマツアリは南日本に分布する小型のアリだが、近年の研究により、女王は次世代女王を、オスは次世代オスを自らのクローンとして生産し、ワーカー生産時にのみ有性生殖を用いるという、生物としては異例の繁殖様式を持つことが明らかとなった。この結果、雌雄の間には遺伝子交流はなく、実際に明瞭な遺伝的分化が見られる奇妙な生物である。このような繁殖様式下では、通常の有性生殖生物とは全く異なる雌雄間の相互作用が予想されるが、このラウンドテーブルでは、現在までにわかっているウメマツアリの遺伝、行動、生態、進化などについて最新の知見を紹介し、この常軌を逸した生物のバイオロジーを考察したい。なお、この集会は科学研究費補助金基盤研究B「オスがオスを無性的にクローン生産するウメマツアリの繁殖機構と進化史の解明」の研究集会を兼ねて行う。

アリ類の単為生殖による繁殖虫生産機構 —なぜ雄は生き延びることができたのか?—

○大河原恭祐・岡本美里 (金沢大・自然科学・生物)

何処より来りて何処へ〜クローンオスの起源と進化

○小林和也・長谷川英祐 (北大院・農・生物生態体系)

ウメマツアリにおける特異な性のあり方と単為生殖維持機構について

○岡本美里・大河原恭祐 (金沢大・自然科学・生物)

Ethological School in the Southern Island

動物行動学はニコ・ティンバーゲンが「4つの問い」で研究アプローチを整理し、それらの相補性を説いて以来、総合的生物学のモデルケースであり続けています。実際に、日本動物行動学会では開設以来年次大会では、行動生態学、生理学、ニューロエソロジー、動物社会学、心理学、遺伝学、進化学、数理生物学など、動物の行動に関するあらゆる分野の発表がみられてきました。共通の特定材料生物種を扱うわけではない学会でこのようなアプローチの多様性が見られるのは異例といえるでしょう。しかしその一方で、教育的な試みはあまり行われてきませんでした。これは動物行動学者の強みである総合力の育成に好ましいことではありません。なぜならキャリアの浅い若手研究者は個別分野内で切磋琢磨することで精一杯になりがちだからです。そこで沖縄大会では若手参加者を主な対象にした、動物行動学に関する入門講座を企画しました。初回にあたりターゲットとなるサブ領域は、行動生態学、神経行動学、行動心理学としました。講師陣はこれらの分野で当代世界一線で活躍される方々で贅沢とさえといえます。若手の方はこの機会をお見逃しなく。

時間 大会2日目 2010年11月20日(土) 9:30-12:00
場所 B会場(3F)

講義名と講師

「行動生態学入門」	辻 和希	(琉球大学・農学部)
「神経行動学入門」	松島 俊也	(北海道大学・理学部)
「行動心理学入門」	岡ノ谷 一夫	(東京大学・生命環境科学系)

備考

講演パワーポイントの縮小 pdf は大会 HP よりダウンロードできます。当日配布予定の部数には限りがありますので、参加者は各自印刷し当日持参下さい。

講義要旨

行動生態学入門

辻 和希 (琉球大学・農学部)

この講義では、動物行動学全体の中で行動生態学がどう位置づけられるのかを解説する。この概念的整理のため便利な Tinbergen の4つの質問をまず解説し、次に行動生態学の主要な方法論のうち2つ、「最適化モデル」と「量的遺伝モデルによる表現型の進化動態観測法」を研究実例とともに解説する。動物の行動を適応進化という観点から解き明かす事が行動生態学の目的であることを示す。

神経行動学入門

松島俊也（北海道大学・理学部）

1986年、第1回の神経行動学国際会議（International Congress for Neuroethology, ICN）が日本で開催された折の事、真面目な神経生理学者にWhat is Neuroethology?と問われて、ある著名な教授はこう答えた。Neuroethology is what Neuroethologists do. それではNeuroethologistsとは何だ、と聞くと、Neuroethologists are those who call themselves Neuroethologists. と、これまた簡単に答えたという。実際、Neuroethologistsは自由である。動物行動の機構を理解するために、その行動に最も長けたスーパー・アニマルを選ぶが、これが彼らをしばる唯一の哲学かもしれぬ。その上で、行動を徹底的に定量化し、手を血に染めて脳を開く。長い格闘の末に（…行動生態学でも同様だろうが）、機構に関する膨大なデータが得られるが、そこから普遍的なアルゴリズムを一つでも抽出することができたならば、その人は本当に幸運である。この講義では、コウモリの反響定位に関する古典的な研究と、私自身のヒヨコの神経経済学を例に挙げる。至近要因の理解が生態学にいかにより多くを負うか、進化の理解をどれほど渴望しているか、何につまづき、何を得ているのか、語りたいと思う。

行動心理学入門

岡ノ谷一夫（東京大学・生命環境科学系）

この講義では、動物行動の理解に心理学的な手法がどう生かされているのか、またはどう生かされていないかを、私自身の研究も例にとって解説する。特に行動心理学的な手法では、測定したい現象とは無関係な動因操作によって測定がなされることが時折見受けられる。平たく言うと、生態学的妥当性がない条件で行動測定が行われるのである。このことは良い場合も悪い場合もある。どんなときには良く、どんなときには悪いだろうか。たとえば、小鳥の歌を刺激として、その弁別能力を、餌を強化子としたオペラント条件づけで測定することにどのような利点があり、どのような問題点があるだろうか。成功例・失敗例を紹介しながら、心理学的な手法が動物行動学にどう生かされるべきなのかを探って行きたいと思う。

映像紹介

日時 11月19日 14:00~16:00
場所 B会場（3階）

V-1 14:00~14:15

オガサワラオオコウモリのオス間同性性行動

○杉田典正（立教大院・理）・上田恵介（立教大・動物生態）

V-2 14:15~14:30

ヒメイカが持つもう一つの交接腕 ～スーパースローで見る交接の瞬間～

○佐藤成祥（遠洋水産研究所）・吉田真明（お茶の水女子大）・藤原英史（ドキュメンタリーチャンネル）・春日井隆（名古屋港水族館）

V-3 14:30~14:45

カミキリムシの触角「迎え打ち」における cross-modality – 視覚・嗅覚・振動感覚？

○深谷 緑（東大農・森林/日大・生物資源）・高梨琢磨（森林総研）

V-4 14:45~15:00

隣人は空き巣狙い：フタモンアシナガバチにおける同種他巣の幼虫捕食

○粕谷英一・古市 生（九大・理・生物）

V-5 15:00~15:15

シジュウカラの警戒声：複数の捕食者種に対抗した親子間コミュニケーション

○鈴木俊貴（立教大・理）

V-6 15:15~15:30

ヤブサメの巣に訪れる Extra-pair male の興味深い行動

○上沖正欣（立教大院・理・動物生態）・川路則友（森林総研北海道）・上田恵介（立教大・理・動物生態）

V-7 15:30~15:45

托卵鳥ホトトギスに対する宿主ウグイスの巣防衛行動

○濱尾章二（国立科博・自然教育園）

ポスター発表：前半 P1

日時 11月19日 (13:00~) と20日午前 (~12:00)
場所 ポスター会場

P1-01 飼育ハンドウイルカにおける葛藤解決のための接触行動

○山本知里(長崎大学大学院生産科学研究科,帝京科学大学アニマルサイエンス学科)・森阪匡通(東京大学大気海洋研究所,京都大学野生動物研究センター)・滝導博(神戸市立須磨海浜水族園)・森貴久(帝京科学大学アニマルサイエンス学科)

P1-02 コモンマーモセット幼児の新奇餌への反応－家族の影響の検討

○齋藤慈子(東京大学 総合文化研究科)・中村克樹(京都大学 霊長類研究所)

P1-03 ヒガシアッサムモンキーの群れ間の社会交渉

○小川秀司(中京大・国際教養)・Suchinda Malaivijitnond (Primate Res. Unit, Faculty of Science, Chulalongkorn Univ.)・濱田謙(京都大・霊長類研)

P1-04 目の絵の存在は互惠性への期待を喚起させる

○小田亮・丹羽雄輝(名古屋工大)・本間淳(総研大)・平石界(京都大)

P1-05 飼育下のライオンにおける親和的行動の雌雄差とその社会的機能

○的場知之¹・沓掛展之^{2,3}・長谷川寿一¹(1 東大・総合文化, 2 総研大・葉山, 3 JSTさきがけ)

P1-06 マウス社会行動類似性評価指針の考察

○奥田将己(統計数理研究所)・杉本大樹・高橋阿貴・小出剛(国立遺伝学研究所)

P1-07 温度ロガーを用いたコアジサシの在巢パターンと抱卵温度調節行動の測定

北村亘^{1,2}・○奴賀俊光²・弦間友梨^{2,3}・川久保美鈴^{2,3}・小堀洋美³・増田直也²・樋口広芳¹(1 東大・農・生物多様性, 2 NPO 法人リトルターン・プロジェクト, 3 東京都市大・環境情報)

P1-08 セキセイインコにおける攻撃後親和交渉

○一方井祐子^{1,2}・伊澤栄一¹・渡辺茂¹(1 慶應義塾大学, 2 日本学術振興会)

P1-09 Social networks in a cooperative breeder (協同繁殖するクリボウシオーストラリアマルハシにおける社会的ネットワーク)

○Fumiaki Y. Nomano (Graduate School of Environmental Science, Hokkaido University)・Andrew F. Russell (Centre for Ecology & Conservation, Tremough Campus, University of Exeter)・(Centre for the Integrative Study of Animal Behaviour, Macquarie University)

P1-10 New swarm and/or flock model in asynchronous automata (非同期オートマトンによる群れモデル)

○Hisashi Murakami¹・Takayuki Niizato¹・Masashi Toda²・Koichiro Enomoto²・Toru Moriyama³・Kojiro Iizuka³・Yukio-Pegio Gunji¹(1 Kobe University, 2 Future University Hakodate, 3 Shinshu University)

P1-11 島嶼で繁殖するツバメの分散プロセス: 複数の空間スケールにおける環境要素と社会的要素の影響

○リングホーファー萌奈美(東大・総合文化)・藤田剛(東大・農)・長谷川寿一(東大・総合文化)

P1-12 行動シンドローム (behavioral syndrome) の集団繁殖における機能

○風間健太郎・新妻靖章(名城大・農)・綿貫豊(北大院・水産)

P1-13 魚類での推移的推察(TI): 魚は[A < BかつB < CならばA < C]を導けるか?

○山本直輝・幸田正典(大阪市大・理)

P1-14 カクレクマノミの社会行動

○岩田恵理 (いわき明星大学科学技術学部)

P1-15 アオリイカの群れにおけるネットワークの経時的変動

○杉本親要 (琉球大学大学院理工学研究科)・池田譲 (琉球大学理学部)

P1-16 ミツバチにおける採餌物および採餌経験の「燃料蜜」積載量への影響

○原野健一 (玉川大・脳科学研)・小西崇之・鈴木崇・佐々木正己 (玉川大・農)

P1-17 自身のブルードの養育が遅れていたセグロアシナガバチの創設メスによる他巣への移動

○小柳津渉 (新潟大院 教育)・工藤起来 (新潟大学 教育)

P1-18 フタモンアシナガバチの創設メスの体サイズが営巣活動に及ぼす影響

○草間淑之・白井明日華・工藤起来 (新潟大学・教育)

P1-19 蜜の糖度がフタモンアシナガバチの創設メスの営巣活動に及ぼす影響

○白井明日華・草間淑之・工藤起来(新潟大院・教育)

P1-20 南米に生息するサタンアシナガバチの血縁構造

○小松一磨・山口勇氣・工藤起来 (新潟大・教育)

P1-21 寄生線虫に操作されたキイロスズメバチ女王の行動

○佐山勝彦 (森林総研北海道)・小坂肇 (森林総研九州)・牧野俊一 (森林総研)

P1-22 捕食者による巣の中身の選択：フタモンアシナガバチにおける同種他巣の幼虫捕食

○古市生・粕谷英一 (九大・理・生態)

P1-23 シロアリ抗菌タンパク質の適応的生産調整：女王フェロモンとリゾチーム生産量の関係

○末廣亘・松浦健二 (岡山大院・環境・昆虫生態)

P1-24 シロアリの女王存在情報のコロニー内伝達メカニズム

○松浦健二・山本結花・日室千尋・横井智之 (岡山大・院環境・昆虫生態)

P1-25 女王フェロモンは女王自身の繁殖を抑制するのか？

○山本結花・松浦健二 (岡大院・環境・昆虫生態)

P1-26 コウシュンシロアリにおける生殖巣補完機構

○宮国泰史 (鹿児島大院・連農)・杉尾幸司 (琉球大・教)・辻和希 (琉球大・農)

P1-27 シロアリ卵の揮発性フェロモンの機能について

○日室千尋・横井智之・松浦健二 (岡大院・環境・昆虫生態)

P1-28 蟻の集団行動の定量的解析

○荻原悠佑 (広島大)・桐谷祐司 (広島大)・前田一樹 (広島大)・西村信一郎 (広島大)・中里研一 (理研)・泉俊輔 (広島大)・秋野順治 (京工織)・粟津暁紀 (広島大)・西森拓 (広島大)

P1-29 画像解析を用いた少数アリ集団の行動における定量的特徴の抽出

○桐谷祐司・荻原悠佑・西村信一郎・粟津暁紀・西森拓 (広大理)・中里研一 (理研)・秋野順治 (京工織大工芸)

P1-30 採餌行動を行うロボット群の存在分布に対するフェロモン・コミュニケーションの影響

○藤澤隆介・大野真範 (八戸工業大)・松野文俊 (京大工)

P1-31 幼虫とワーカーの拮抗的共進化：カースト運命をめぐるコンフリクトの数理モデル

○土畑重人 (琉大農)

~~P1-32 トゲオオハリアリにおける巣仲間成虫間の攻撃行動~~ =発表取り消し=

~~○山口勇氣・小林紀絵・小松一磨 (新潟大学・教育)・岩西哲 (みなくち子どもの森自然館)・工藤起来 (新潟大学・教育)~~

P1-33 トゲオオハリアリにおいて翅芽痕切除がワーカーの交尾能力にどう影響するか

○下地博之 (鹿児島大院)・ダイアン=アラード (ルーベン大)・辻和希 (琉大)・ヨハン=ビレン・ブルーノ=ゴバン (ルーベン大)

P1-34 ~~日本産オオハリアリ近縁種群（膜翅目：アリ科）の再検討~~ **＝発表取り消し＝**

~~○矢代敏久・松浦健三（岡山院・環境・昆虫生態）~~

P1-35 ヒメハダカアリの繁殖戦略：野外における有翅雄と女王の生理状態

○吉澤樹理（岐阜大院・応用生物・昆虫生態）・山内克典（岐阜大学名誉教授）・土田浩治（岐阜大・応用生物・昆虫生態）

P1-36 多巣性のアリにおける巣仲間認識

○小林紀絵・小松一磨・山口勇氣・（新潟大・教育）・岩西哲（みなくち子どもの森自然館）・工藤起来（新潟大・教育）

P1-37 ヤドリウメマツアリの社会寄生に対する宿主種ウメマツアリの対抗戦略

○大河原恭祐・一言真人・梅原那央（金沢大・自然システム・生物）

P1-38 アルゼンチンアリのスーパーコロニー間における闘争と遺伝構造の関係

○井上真紀・五箇公一（国立環境研究所）・伊藤文紀（香川大学）

P1-39 トビイロケアリにおける病気蔓延のリスク回避

○奥野正樹（京大・院・昆虫生態）・辻和希（琉大・農）・藤崎憲治（京大・院・昆虫生態）

P1-40 ヨシノミヤアブラムシの防衛行動：親も子もコロニーを守る

○植松圭吾・柴尾晴信・嶋田正和（東大院・総合文化）

P1-41 群れ形成のコンフリクトが決めるトビケラの採餌分布

○加藤聡史・近藤倫生（龍谷大学）、土居秀幸・片野泉（オルデンブルク大学）

P1-42 ハマベハサミムシの親にとっての育児のコスト

○鈴木誠治（長岡技術科学大学）

~~**P1-43** 亜社会性ツノオオアザミウマの卵塊保護行動の生起要因について~~ **＝発表取り消し＝**

~~○村松大地（岐阜大・応生）・土田浩治（岐阜大・応生）~~

P1-44 ベニツチカメムシにおける子供間の対立

○野間口眞太郎（佐賀大・農）・フィリップリサ（Hofstra 大学・生物）

P1-45 亜社会性シロヘリツチカメムシの親はいつ、どのような外傷を被るのか？

○馬場成実（九大院・生防研）・弘中満太郎（浜松医科大・生物）・上野高敏（九大院・生防研）

P1-46 ベニツチカメムシの孵化時にみられる雌親の奇妙な振動行動

○向井裕美（佐賀大・農）・弘中満太郎（浜松医大・生物）・藤條純夫・野間口眞太郎（佐賀大・農）

P1-47 野生チンパンジーの未成熟個体の糞中コルチゾールを用いたストレスの定量的評価

○松阪崇久（関西大・人間健康）・藤田志歩（山口大・農）

P1-48 イノシシにおける幅跳び能力の測定

○江口祐輔（近中四農研）・赤井克己（タイガー（株））・堂山宗一郎（麻布大・獣医）

P1-49 ハクビシンにおける侵入可能な垂直隙間幅の検討

○加瀬ちひろ（麻布大・獣医・行動管理）・江口祐輔（近中四農研）・古谷益朗（埼玉県農林総研セ）・植竹勝治・田中智夫（麻布大・獣医・行動管理）

P1-50 家畜化スクスはどのように係わり合うか

○松崎治（筑波大・生命環境）

P1-51 ハトはナルシスト？—自己鏡像と他個体を提示した選好観察—

○草山太一（帝京大学文学部心理学科）

P1-52 ミドリムシ集団の強光場内でのパターン形成

○野田脩平（広島大学大学院数理分子生命理学）・末松 J.信彦・粟津暁紀・西森拓

P1-53 トラフコウイカにおけるボディパターンの個性

○岡本光平（京都大学・大学院理学研究科）・池田譲（琉球大学・理学部）

P1-54 タイリクモモンガ *Pteromys volans* における効率が悪く負荷が大きい短距離滑空の役割

○鈴木圭 (岩大院 連合農学・帯畜大 野生動物管理)・浅利裕伸 ((株)長大)・柳川久 (岩大院 連合農学・帯畜大 野生動物管理)

P1-55 イヌの身震い行動と口舐め行動は社会的な緊張によって引き起こされるか

○高部敏充(帝京科学大学)

P1-56 飼育者の注意状態に応じたニホンザルの確認行動・要求行動の変化

○村井千寿子 (玉川大学・脳科学研究所)・友永雅己 (京都大学・霊長類研究所)

P1-57 チンパンジーによる運動方向判断における「前進」バイアス

○友永雅己・伊村知子 (京都大学霊長類研究所)

P1-58 拘束条件下のアメリカウミザリガニにおける光刺激に対するオペラント弁別学習能の検証

○富菜雄介・高畑雅一 (北海道大学大学院生命科学院生命システム科学コース)

P1-59 アジアゾウの落書き

○入江尚子 (総合研究大学院大学)

P1-60 イノシシにおける複合T字迷路試験による学習能力の評価

○堂山宗一郎 (麻布大・獣医)・江口祐輔・上田弘則 (近中四農研)・植竹勝治・田中智夫 (麻布大・獣医)

P1-61 未熟果実入りリンゴジュースを飲んだ3世代目マウスは迷路学習能力が向上する

○城田安幸・畠山正光・工藤裕一・重友 薫 (弘前大学 農学生命科学部)

P1-62 セキセイインコの条件づけられた発声は社会的な要因に影響を受ける

○関義正 (理化学研究所・メリーランド大学)・Robert J. Dooling (メリーランド大学)

P1-63 群れはマアジの学習を促進するか? -海産魚マアジにおける社会学習の効果-

○高橋宏司・益田玲爾・山下洋 (京大フィールド研セ)

P1-64 ブラインドケープフィッシュの空間学習

○種田耕二・奥川未来 (高知大・自然科学系・理学部門)

P1-65 熱帯性頭足類の孵化時における脳の多様性

○小林しおり (琉球大学大学院理工学研究科)・池田 譲 (琉球大学理学部)

P1-66 遊びのエソロジカルな研究の論理的正当化

○島田将喜 (帝京科学大学・アニマルサイエンス学科)

P1-67 動物行動軌跡データと角度自己回帰モデル

○島谷健一郎 (統計数理研究所)

P1-68 振動する兵隊ガニ The Oscillating Soldier Crabs

○西山雄大¹・榎本光一郎³・戸田真志³・郡司ペギオ幸夫^{1,2} (1. 神戸大学理学研究科, 2. 神戸大学理学部地球惑星科学科, 3. はこだて未来大学情報アーキテクチャ学科)

P1-69 セキセイインコのリズム感—同期タッピング課題による検討

○長谷川愛 (東京大・理研BSI)・岡ノ谷一夫 (東京大・理研BSI)・長谷川寿一 (東京大)・関義正 (理研BSI)

P1-70 カブトガニ (*Tachypleus tridentatus*) の活動リズムと同調因子

○渡辺伸一・東川光二郎 (福山大)・惣路紀通・森信敏 (カブトガニ博)・田上英明・宮崎信之 (東大海洋研)

P1-71 長期間記録によるスナネズミの行動の概日リズムおよび音声の機能の検討

○中田幸成・小林耕太・カ丸裕 (同志社大学生命医科学部)

P1-72 飼育下シャチにおけるコールタイプの日周変化

○佐々木友紀子 (京都大学野生動物研究センター・日本学術振興会)・岩崎真里 (東京工業大学)・荒井一利 (鴨川シーワールド)・幸島司郎 (京都大学野生動物研究センター)

P1-73 ハシブトガラスの個体認知における視覚—聴覚情報の統合の検証

○近藤紀子 (慶應義塾大・JSPS)・伊澤栄一・渡辺茂 (慶應義塾大)

P1-74 ヒト音声処理におけるイヌの聴覚側性化

○淡路遼・今野晃嗣・Sean Lee・齋藤慈子・長谷川寿一（東大・総合文化）

P1-75 コビレゴンドウにおける鳴き交わり

○中原史生（常磐大）・東直人（海洋博財団）・岡部晴菜（海洋博財団・総研セ）・江本博俊（SIT）・内田詮三（沖縄美ら海水族館）

P1-76 草原のキャノピー定位：フタボシツチカメムシのナビゲーションシステム

○弘中満太郎（浜松医大・生物）・馬場成実（九大院・生防研）・針山孝彦（浜松医大・生物）

P1-77 カブトムシの蛹が発する振動は幼虫に回避を促す信号としてはたらく

○小島 渉・石川幸男（東大農学生命）・高梨琢磨（森林総合研究所）

P1-78 同所イトヨ間の生殖ホルモンの分化

○川岸由^{1, 2}・森誠一³・日下部誠⁴・河田雅圭¹・ペイケル キャサリン⁵・北野潤¹（1東北大・院・生命、2東北大・院・化学、3岐阜経済大・生物、4東京大・大気海洋研、5Fred Hutchinson Cancer Research Center）

P1-79 夜行性魚類における個体間コミュニケーション：ギギの体サイズに依存したドミナント雄の決定とその認知シグナル

鳥居千晴（アジア航測株式会社）・久米学（自然共生研究センター）・森誠一（岐阜経済大）

P1-80 アキタイヌの「性格」とアンドロゲン受容体遺伝子多型の関連

○今野晃嗣（東大・総合文化、日本学術振興会）・井上-村山美穂（京大・野生動物）・長谷川寿一（東大・総合文化）

P1-81 母マウスにおける仔マウス超音波への反応性に対する嗅覚刺激の影響

○岡部祥太・永澤美保・茂木一孝・菊水健史（麻布大学獣医学部伴侶動物学研究室）

P1-82 刻印付けはヒヨコの生得的なBM 選好性を誘導する

○三浦桃子（北大・生命科学院）・松島俊也（北大・理学研究院）

ポスター発表：後半 P2

日時 11月20日午後(13:00~)と21日(~12:00)
場所 ポスター会場

P2-01 騙しのシグナルか正直なシグナルか: ハクセンシオマネキの作る盛り土「フード」に対する雄と雌の反応

○村松大輔(京都大学)

P2-02 ペニスを使い捨てるウミウシとしないウミウシはどこが違うのか?

○関澤彩眞・志賀向子(大阪市大・院理)・中嶋康裕(日大・経済)

P2-03 ババヤスデ属における性的軍拡競走による交尾器形態進化

○田辺力(熊本大・教育)・曾田貞滋(京大院・理)

P2-04 ハゼ科魚類 *Pomatoschistus minutus* の代替繁殖戦術: タイプの異なるスニーカー雄の戦術転換の可能性

○竹垣毅(長崎大・水産)・Ola Svensson・Charlotta Kvarnemo (Univ. Göteborg, SW)

P2-05 個体発生に伴うメダカの配偶行動の変化とその緯度間変異

○川尻舞子・鈴木雄也(新潟大・院・自然環境)・山平寿智(琉球大・熱生研)

P2-06 魚類における保護者の性の潜在的柔軟性—雌雄異体スズメダイ類での検証

○坂井陽一・国吉久人・松下佳津也・橋本博明(広島大学)・中山寛美・馬場宏治(須磨海浜水族園)

P2-07 逆方向の性転換が起こる条件: 一夫多妻魚類の場合

○桑村哲生(中京大国際教養)・鈴木祥平(沖縄科学技術研)・門田立(西海区水研)

P2-08 卵保護中のロウソクギンポ雄はなぜ配偶成功が低いのか?: 保護コストと繁殖サイクルの影響

藪野惇大(長崎大・水産)・○松本有記雄・Solomon Kiros(長崎大院・生産)・征矢野清(長崎大・海セ)・竹垣毅(長崎大・水産)

P2-09 シワイカナゴの縄張り雄は群れ雄とどう行動が異なるか?

○成田英毅(東海大院海洋)・赤川泉(東海大海洋)

P2-10 雄のサイズにより逆転するカワヨシノボリ雌の巣選択基準

○吉村直也・安田裕樹・オマー ミン・幸田正典(大阪市大理)

P2-11 サンゴタツの雄が好きな雌、雌が好きな雄とは…「顔見知りの子」か? 「大きい子」か?

○後藤聡子・河合彩弓・長谷川とも恵(東海大・海洋)・鈴木宏易(東海大海洋博)・赤川泉(東海大・海洋)

P2-12 反転する斑点を「混ぜる」とどうなるか?—交雑による体表模様の変化

○宮澤清太・近藤滋(阪大・院・生命機能)・岡本康寿(札幌市豊平川さけ科学館)

P2-13 グッピーにおける雌の柔軟な配偶者選好性と産子調節

○工藤宏美・狩野賢司(東京学芸大学)

P2-14 雌グッピーの子の性配分に影響を与える要因~配偶様式や繁殖経験は雄の魅力に応じた雌の性配分に影響を与えるか?

○佐藤綾・狩野賢司(東京学芸大学・連合学校教育学)

P2-15 雌の変異が結果を決める - シクリッド科魚類の性的体サイズ二型に関する種間比較研究 -

○坪井助仁(京都大学大学院農学研究科)・Alejandro Gonzalez Voyer (Donana Biological Station)・Niclas Kolm (Uppsala University Department of Animal Ecology)

P2-16 館山湾におけるベラ科オハグロベラ*Ptragogus aurigarius* が性転換する条件について

○木原聡美・須之部友基（東京海洋大学館山ステーション 魚類行動生態学研究室）

P2-17 雌の卵生産と雄の卵保護を介した配偶をめぐる雌雄の対立

○曾我部篤（広島大・院・生物圏）

P2-18 雌の交尾回数と雄の射精量の関係：モデル解析からのアプローチ

○安部淳（静岡大・連合農）・上村佳孝（慶応大・生物）

P2-19 フタイロカミキリモドキの配偶成功：オスの後脚腿節が細い奄美個体群の場合は？

○小汐千春・高嶋宏（鳴門教育大・学校教育）・立田晴記（琉球大・農）・工藤慎一（鳴門教育大・学校教育）

P2-20 メダカナガカメムシにおけるメス再交尾率の二個体群間での比較

○洲崎雄・宮竹貴久（岡大院・環境・進化生態）

P2-21 雄の射精物と雌のパフォーマンス：アカスジカスミカメの場合

○奥圭子（中央農研）・狐塚慶子（宮城県病害防除所）

P2-22 子守り雄は雌にとって魅力的か？ 雌のタガメに関する選好性の検証

○門司麻衣子（京都大学 理 動物行動）

P2-23 キハダカノコ (*Amata germana*) の配偶行動の解析 ～眼は鼻ほどに効く？～

○近藤勇介（岐阜大・昆虫生態学研）・中秀司（鳥取大・害虫制御学研）・土田浩治（岐阜大・昆虫生態学研）

P2-24 モモノゴマダラノメイガの音響交信：オスの超音波によるメスの交尾受入れ行動

○中野亮・井原史雄（農研機構果樹研）・石川幸男（東大農）・高梨琢磨（森林総研）

P2-25 ビロウドツリアブのコバノミツバツツジ訪花行動における性差、花上採食行動と移動習性

○小川陽平・川窪伸光（岐阜大院・応用生物科学）

P2-26 オオカマキリの性的共食い再考

渡辺衛介（広島大院・生物圏）・○三浦一芸（広島大院・生物圏、近中四農研）

P2-27 大量増殖がアリモドキゾウムシの交尾行動に及ぼす影響

○城本啓子・熊野了州・栗和田隆（沖縄県病害虫防除技術センター／（株）琉球産経）・原口大（沖縄県病害虫防除技術センター）

P2-28 オス交尾器のトゲがもたらす交尾のコスト

○熊野了州・栗和田隆・城本啓子（沖縄県病害虫防除技術センター／（株）琉球産経）・原口大（沖縄県病害虫防除技術センター）

P2-29 アズキゾウムシにおけるオスの産卵促進成分の種内変異の検証

○山根隆史（中央農研・北陸研究センター）

P2-30 潤いは交尾を抑制：マメゾウムシのメスにおける多回交尾の適応度上の利益と水分補給

○原野智広（九大院・理・生態科学）

P2-31 他人を拒否し、近親者と交尾するイモゾウムシ

○栗和田隆・熊野了州・城本啓子（沖縄防技セ・琉球産経）・原口大（沖縄防技セ）

P2-32 ヒト集団における選択交配 II

○小須田和彦（城西大・教養・生物）

P2-33 ヒト配偶者選択における自分や親、他者の形質の影響：身長に注目した研究

○関元秀・井原泰雄・青木健一（東京大学大学院理学系研究科）

P2-34 スンバ人における顔の類似性に依存した配偶者選択

能城沙織（東京大理）・○井原泰雄（東京大理）・清水華（東京大医）・赤松茂（法政大工）・石田貴文（東京大理）

P2-35 野生チンパンジーでは、発情のさけあいは出産率の低下をもたらす

○松本晶子（琉大・観光）・井原泰雄（東大・理）

P2-36 ノネコの恋模様 ～非発情期のオスメスの関係はその後の配偶行動にどう影響するか？～

○山本宇彦・粕谷英一（九大・理・生態）・早野あづさ・村山美穂（京大・野生動物研究センター）

P2-37 ブッポウソウの繁殖期における雌雄の役割分担

○水野聖子¹・木村裕一²・峯光一³・松島康⁴・三枝誠行⁴（1：岡大院・自然、2：日本鳥類標識協会、3：（株）南西環境研究所、4：岡大・理）

P2-38 育雛期におけるヒゲペンギンの採餌トリップの組立て：ペア内の雌雄差

○森貴久（帝京科学大学）・國分瓦彦・高橋晃周（国立極地研究所）

P2-39 ハシブトガラス若鳥オスの相互羽づくろいはメスへの信号か？

○伊澤栄一・渡辺茂（慶應大）

P2-40 性的体サイズ二型逆転の謎をさぐる：なぜジュウシマツの雌は大きくなったのか？

○相馬雅代（北大院理, 理研BSI）・岡ノ谷一夫（東大院総文, 理研BSI）

P2-41 闘わずして勝つ！ -ノコギリクワガタの小型オスに先住効果はあるか？-

○井上明雄・長谷川英祐（北大院・農・生物生態体系）

P2-42 技は力を凌駕した？！

○本郷儀人（京大・理・動物行動）

P2-43 コスタリカに生息するオトシブミ科甲虫 *Xestolabus corvinus* の揺りかご形成行動および葉の非対称認識

○櫻井一彦（成城大学・社会イノベーション学部）

P2-44 ミュラー型擬態が寄生関係になるとき-ヒヨコによる実験-

○本間淳（総研大・先端科学）・Johanna Mappes（University of Jyväskylä）

P2-45 マイマイガ雌成虫はどこまで飛べるか？：フライトミルによる飛翔能力の測定

○亀井幹夫・藤田和彦（広島総研林技セ）・軸丸祥大（広島総研農技セ）・原秀穂（北海道総研林試）・東浦康友（東京薬科大）

P2-46 食草をめぐるスジグロシロチョウとエゾスジグロシロチョウの種間競争

○大秦正揚（京大理・動物行動）・大崎直太（京大農・昆虫生態）

P2-47 コチャバネセセリ幼虫が摂食する笹の葉の質

○井出純哉（久留米工大・工・教育創造工）

P2-48 Rejection and Acceptance of Bumblebees in Flower Visit on *Impatiens textori*

○Jahir Raihan・Nobumitsu Kawakubo（United Graduate School of Agricultural Science, Gifu University）

P2-49 塩分に対応した両生類幼生の孵化行動のトレードオフ

○原村隆司（京大院・理・動物行動）

P2-50 シジュウカラ科3種の食性分化：リスク感受性の違いから進化過程を考察する

○川森愛（北大・生命科学学院、日本学術振興会）・松島俊也（北大・理学研究院）

P2-51 他者の視覚的知覚はヒヨコ *Gallus domesticus* の労働投資量を増大させる

○小倉有紀子（北大・生命科学学院）・松島俊也（北大・理学研究院）

P2-52 カラスの遊び行動～北海道大学における行動記載～

○福岡要（北大・理学部）・黒沢令子（バードリサーチ）・松島俊也（北大・理学研究院）

P2-53 乾燥疎開林におけるチンパンジーのベッドの崩壊速度

○吉川翠（東京農工大学大学院・連合農学研究科）・小川秀司（中京大学・国際教養学部）・小金澤正昭（宇都宮大学・農学部）・伊谷原一（京都大学・野生動物研究センター）

P2-54 ぐるぐる回って移動する？：キタオットセイの潜水行動

○三谷曜子（北大フィールド科セ）・Vladimir N. Burkanov（NOAA）・Russel D. Andrews（ASLC, Univ Alaska）

P2-55 エボシフジツボとミナミハンドウイルカの知られざる関係

○篠原正典・中司千里（帝京科学大学生命環境学部）・小木万布（御蔵島観光協会）・高縄奈々（御蔵島村鉄砲場）・林亮太（千葉大学自然科学研究科）・森恭一（小笠原ホエールウォッチング協会）

P2-56 ヤマカガシの環境利用

○児島庸介（京大・動物行動）

~~**P2-57 シマヘビは食べられない餌（ツチガエル）の「におい」を嫌うか？**~~

~~発表取り消し~~

~~○吉村友里・粕谷英（九大・理・生態研）~~

P2-58 低酸素条件でのモツゴの水面呼吸（ASR）と捕食者の影響

○三浦さやか（弘前大院・農学生命科学）・吉田綾乃（弘前大・農学生命科学）・佐原雄二（弘前大・農学生命科学）

P2-59 アマゴのお引越しいアマゴに好まれる棲み家の条件は？

○金澤拓也・齋藤竜也・森本溪一郎（東海大・海洋）・中道一彦（気田川漁協）・赤川泉（東海大・海洋）

P2-60 高緯度のメダカは大食漢だが泳ぎが下手である

○鈴木雄也（新潟大・院・自然科学）・山平寿智（琉球大・熱生圏）

P2-61 いつサンゴタツは巻きつくの？ 一水流・水温条件と雌雄による差

○岡崎宏美（東海大院海洋）・鈴木宏易（東海大博物館）・赤川泉（東海大海洋）

P2-62 カワヨシノボリの雄のサイズによる繁殖戦略の違い：卵保護と追加産卵のトレードオフ

○安田裕樹・オマーミン・吉村直哉・幸田正典（大阪市大院・理）

P2-63 リュウキュウアユの摂餌なわばりのサイズは生息密度と競争能力に応じて変異する

○安房田智司・鶴田哲也・阿部信一郎・玉置泰司・井口恵一朗（中央水研）

P2-64 鱗食魚における捕食の行動学的解析：著しい左右二型

○竹内勇一（名大・理・脳機能構築学）・堀道雄（京大・理・動物生態）・小田洋一（名大・理・脳機能構築学）

P2-65 三者同居の巣穴とハナハゼペアの行動

○金森咲季・加藤栄一（東海大海洋）・岩瀬文人（黒潮研）・中野正夫（Seahorse）・赤川泉（東海大海洋）

P2-66 館山湾におけるホンベラの繁殖様式

○豊田克也（東京海洋大学・館山ステーション）・木村清志（三重大学）・須之部友基（東京海洋大・館山ス）

P2-67 資源の価値と資源保持能力が繁殖期と非繁殖期における雄ガコの闘争能力を決める

○古賀庸憲・高岡淳子・Sultana Zakea・（和歌山大・教育）

P2-68 クモの成長に伴う網形態の変化は"biogenetic law"で説明できるか？

○中田兼介（東京経済大）

P2-69 トゲゴミグモ *Cyclosa confusa* の網構造と造網環境との関係

○近藤昇平（琉球大・院・農）・辻和希（琉球大・農）・立田晴記（琉球大・農）

P2-70 タコ類における環境エンリッチメント効果の検証

○安室春彦（琉球大学大学院理工学研究科）・池田 譲（琉球大学理学部）

P2-71 深海ハコエビに付着するヒメエボシの生活史と宿主上での分布

○山口幸（九州大学、学振PD）・金子篤史（沖縄美ら海水族館）

P2-72 On autotomy in the octopus, *Abdopus aculeatus*: does personality play a role?

○Amy Arnet・Yuzuru Ikeda（Department of Marine and Environmental Science,

University of the Ryukyus)

P2-73 雌雄同体の軟体動物 キヌハダモドキはなぜ・どうやって共食いするのか？

○中野理枝（琉球大学 理工学研究科）

P2-74 蚊帳の使用によるマラリア媒介蚊種構成の変化

○二見恭子（長崎大学熱帯医学研究所）・Gabriel O. Dida（Maseno University）・皆川昇（長崎大学熱帯医学研究所）

P2-75 卵寄生蜂密度は寄生率に影響するか

○平山寛之・粕谷英一（九大・理・生態）

P2-76 The importance of food and host on the fecundity and longevity of a host-feeding parasitoid

○ Hongyue Liu・Takatoshi Ueno (Fac. Agric., Kyushu Univ.)

P2-77 マイクロサテライトを用いたクリサキtentウの集団構造解析に関する検討

○土山悠（京産大院・工）・高橋純一・野村哲郎（京産大・総合生命）

P2-78 遺伝的に飛翔能力を欠くナミtentウの機能の反応

○世古智一・三浦一芸（近中四農研）

P2-79 繁殖干渉による寄主特殊化の進化：捕食性tentウムシにおける実証

○鈴木紀之・西田隆義（京大昆虫生態）・大澤直哉（京大森林生態）

P2-80 接近物体に対するカマキリ防御行動：サイズ、速度、接近軌道の効果

○山脇兆史（九大・理・生物科学）

P2-81 寄生蜂*Heterospilus prosopidis* の宿主探索行動における意志決定過程の解析

○阿部真人・堀部直人（東大院・総合文化）・嶋田正和（東大院・総合文化）

P2-82 地中で寄主探索を行うツチバチにおける地上からの探索開始位置決定戦略

○谷聡一郎・上野高敏（九大院・生防研）

P2-83 イトトンボヤゴ2 種間の捕食者による食われやすさの違いと群集内での優占度

○片山元気・立田晴記（琉球大・農）

P2-84 クサカゲロウ幼虫の塵乗せ行動のアリに対する防御効果

○林正幸・長泰行・野村昌史（千葉大学園芸学研究科）

P2-85 在来系統シクガタマバエの捕食と食い荒らし行動の解析

○渡部宏・矢野栄二・中嶋絵里菜・桂明宏・花嶋千咲（近大院・農・昆虫生態制御）

P2-86 アリ共生型・非共生型シジミチョウに対するアリの学習行動

○北條賢（琉球大・農）・山本有里・秋野順治・山岡亮平（京工織大・工芸化学）

参加者名簿 (事前申込者, 五十音順)

S: シンポジウム, P: ポスター, V: 映像紹介, R: ラウンドテーブル, G: 南の学校, A: 受賞講演

懇親会	申込者氏名	所属	番号
○	Arnett Amy Rose	琉球大学大学院 理工学研究科	P2-72
○	赤川泉	東海大学 海洋学部	P2-59, P2-65, P2-11, P2-61, P2-09
○	秋元信一	北海道大学大学院 農学研究院 昆虫体系	R2
○	安部淳	静岡大学 連合農学部	R2, P2-18
○	阿部真人	東京大学大学院 総合文化研究科	R1, P2-81
	淡路遼	東京大学大学院 総合文化研究科	P1-74
○	安房田智司	水産総合研究センター 中央水産研究所	P2-63
○	安藤陽子	東京農工大学	
○	池田謙	琉球大学 理学部 海洋自然科学科	S, P1-15, P1-53, P1-65, P2-70, P2-72
○	池淵万季	JST ERATO 岡ノ谷情動情報プロジェクト	
○	伊澤栄一	慶應義塾大学	P1-08, P1-73, P2-39
○	石田惣	大阪市立自然史博物館	
○	一方井祐子	慶應義塾大学	P1-08
○	井出純哉	久留米工業大学 工学部 教育創造工学科	P2-47
○	井上明雄	北海道大学大学院農学院 生物生態・体系学講座	P2-41
	井上真紀	国立環境研究所	P1-38
	井原泰雄	東京大学大学院 理学系研究科	P2-33, P2-34, P2-35
	入江尚子	総合研究大学院大学	P1-59
	岩田恵理	いわき明星大学	P1-14
○	上田恵介	立教大学 理学部	V-1, V-6
○	上原隆司	総合研究大学院大学	
○	植松圭吾	東京大学大学院 総合文化研究科広域科学専攻 広域システム科学系	P1-40
○	江口和洋	九州大学大学院 理学研究院 生物科学部門	R3
	江口祐輔	近畿中国四国農業研究センター	P1-48, P1-49, P1-60
○	大河原恭祐	金沢大学 自然システム学類 生物学コース 生態学研究室	P1-37, R5
	大塚公雄	所属なし	
○	大秦正揚	京都大学理学研究科 生物科学専攻動物学教室 動物行動学研究室	P2-46
○	岡崎宏美	東海大学大学院 海洋学研究科水産学専攻	P2-61
○	岡部祥太	麻布大学 伴侶動物学研究室	P1-81
	岡本光平	京都大学大学院 理学研究科動物学教室 動物行動学研究室	P1-53
○	岡本美里	金沢大学 自然科学研究科 生命科学専攻	R5
○	小川秀司	中京大学国際教養学部	P1-03, P2-53
	小川陽平	岐阜大学大学院 応用生物科学研究科 生物環境科学専攻	P2-25
	荻原悠佑	広島大学 理学研究科 数理分子生命理学専攻	R1, P1-28, P1-29
○	奥圭子	中央農業総合研究センター	P2-21
○	奥田将己	統計数理研究所	P1-06
○	奥野正樹	京都大学大学院 農 昆虫生態	P1-39

○	小倉有紀子	北海道大学 生命科学院	P2-51
	小田亮	名古屋工業大学	P1-04
○	小柳津渉	新潟大学大学院 昆虫生態学研究室	P1-17
○	風間健太郎	名城大学農学部	P1-12
○	粕谷英一	九州大学理学部 生物学教室	V-4, P1-22, P2-36, P2-57, P2-75
	加瀬ちひろ	麻布大学	P1-49
○	片山元気	琉球大学	P2-83
	加藤聡史	龍谷大学 科学技術共同研究センター	P1-41
	門田立	西海区水産研究所	P2-07
	金澤拓也	東海大学 海洋学部 海洋生物学科	P2-59
	金森咲季	東海大学 海洋学部	P2-65
	上沖正欣	立教大学大学院理学研究科 生命理学専攻	V-6
	亀井幹夫	広島県立総合技術研究所林業技術センター	P2-45
○	狩野賢司	東京学芸大学	R2, P2-13, P2-14, S
	河合彩弓	東海大学海洋学部 海洋生物学科	P2-11
	川岸由	東北大学生命科学研究科 生物多様性進化	P1-78
	川尻舞子	新潟大学	P2-05
○	川津一隆	京都大学大学院 農学研究科 昆虫生態学研究室	R2
	川端俊一	沖縄県立 宮古高等学校	
○	川森愛	北海道大学	P2-50
	岸本匡司	ハートランド信貴山	
	北田裕也	鹿児島大学 教育学研究科	
	木下智章	佐賀大学農学部 応用生物科学科	R2
○	木原聡美	東京海洋大学大学院	P2-16
○	木村亮介	琉球大学	S
	桐谷祐司	広島大学 理学研究科 数理分子生命理学専攻	R1, P1-28, P1-29
	草間淑之	新潟大学	P1-18, P1-19
	草山太一	帝京大学	P1-51
○	工藤起来	新潟大学 教育学部	P1-32, P1-36, P1-18, P1-20, P1-19, P1-17
○	工藤慎一	鳴門教育大学	P2-19
○	工藤宇	アグロカネショウ (株)	
	工藤宏美	東京学芸大学	P2-13
○	熊野了州	沖縄病害虫防技センター (株)琉球産経	P2-27, P2-28, P2-31
○	久米学	独立行政法人土木研究所 自然共生研究センター	P1-79
○	栗和田隆	沖縄県病害虫防除技術センター (株)琉球産経	P2-31, P2-27, P2-28
	黒川瞬	東京大学	
○	桑村哲生	中京大学 国際教養学部	P2-07
	幸田正典	大阪市立大学大学院 理学研究科	P1-13, P2-10, P2-62
	香田康年	吉備国際大学	
	興柁あや	長崎大学 水産学部	
○	古賀庸憲	和歌山大学 教育学部	P2-67

○	小汐千春	鳴門教育大学 学校教育学部	R4, P2-19
	児島庸介	京都大学大学院 動物行動学研究室	P2-56
	小島渉	東京大学 農学生命科学研究科	P1-77
	小須田和彦	城西大 教養 生物	P2-32
	後藤聡子	東海大学海洋学部海洋生物学科	P2-11
○	小林和也	北海道大学 農学院環境資源学専攻 生物生態体系学講座	R3
○	小林しおり	琉球大学大学院 理工学研究科	P1-65
○	小林紀絵	新潟大学大学院 教育学研究科 昆虫生態学研究室	P1-32, P1-36
○	小松一磨	新潟大学大学院 昆虫生態学研究室	P1-20, P1-32, P1-36
	近藤昇平	琉球大学 農学研究科	P2-69
○	近藤紀子	慶應義塾大学 大学院社会学研究科	P1-73
○	近藤勇介	岐阜大学 昆虫生態学	P2-23
	今野晃嗣	東京大学大学院 総合文化研究科	P1-74, P1-80
	齋藤慈子	東京大学 総合文化研究科	P1-02, P1-74
	齋藤竜也	東海大学 海洋学部海洋生物学科	P2-59
○	坂井陽一	広島大学大学院 生物圏科学研究科	P2-06
	坂倉弘康	クラーク株式会社	
○	櫻井一彦	成城大学 社会イノベーション学部	P2-43
○	佐々木友紀子	京都大学 野生動物研究センター	P1-72
○	佐藤綾	東京学芸大学 連合学校教育学研究科	S, R2, P2-14
○	佐藤成祥	遠洋水産研究所	V-2
○	佐藤芳文	京都医療科学大学	
○	佐山勝彦	森林総合研究所 北海道支所	P1-21
○	澤田紘太	総合研究大学院大学	
	佐原雄二	弘前大学 農学生命科学部	P2-58
○	篠原正典	帝京科学大学 自然環境学科	P2-55
	嶋田正和	東京大学大学院 総合文化研究科広域科学専攻	R1, P1-40, P2-81
○	島田将喜	帝京科学大学 アニマルサイエンス学科	P1-66
○	島谷健一郎	統計数理研究所	P1-67
○	下地博之	鹿児島大学	P1-33
	下野大造	北海道大学大学院 農学院 生物生態・体系学講座 動物生態学研究室	
	白井明日華	新潟大学大学院 昆虫生態学研究室	P1-18, P1-19
○	城田安幸	弘前大学 農学生命科学部	P1-61
○	城本啓子	沖縄県病害虫防除技術センター	P2-27, P2-28, P2-31
○	新村毅	名古屋大学大学院 生命農学研究科	
○	末廣亘	岡山大学大学院 環境学研究科昆虫生態学研究室	P1-23
○	杉田典正	立教大学大学院 理学研究科	V-1
○	杉本周作	琉球大学大学院 農学研究科	
○	杉本親要	琉球大学大学院 理工学研究科	P1-15
○	洲崎雄	岡山大学大学院 環境学研究科進化生態学研究室	P2-20
	鈴木圭	岩手大学大学院	P1-54
○	鈴木誠治	長岡技術科学大学	P1-42
○	鈴木俊貴	立教大学大学院 動物生態学研究室	V-5

○	鈴木紀之	京都大学大学院 農学研究科昆虫生態学研究室	P2-79
	鈴木雄也	新潟大学大学院 自然科学研究科	P2-60, P2-05
○	須之部友基	東京海洋大学 館山ステーション魚類行動生態学研究室	P2-16, P2-66
○	関元秀	東京大学	P2-33
○	関義正	理化学研究所 脳科学総合研究センター生物言語研究チーム	P1-62, P1-69
○	関澤彩眞	大阪市立大学大学院 理学研究科	P2-02
	世古智一	近畿中国四国農業研究センター	P2-78
○	相馬雅代	北海道大学	P2-40
○	曾我部篤	広島大学大学院 生物圏科学研究科	P2-17
○	高橋宏司	京都大学フィールド科学教育研究センター 舞鶴水産実験所	P1-63
○	高部敏充	帝京科学大学アニマルサイエンス専攻	P1-55
○	竹内勇一	名古屋大学理学研究科 脳機能構築学研究室	P2-64
○	竹垣毅	長崎大学 水産学部	P2-04, P2-08
○	立田晴記	琉球大学 農学部	P2-19, P2-69, P2-83
○	田中啓太	理化学研究所 脳科学総合研究センター	A
○	田中豊人	東京都健康安全研究センター	
○	田辺力	熊本大学 教育学部	P2-03
○	谷聡一郎	九州大学 生物的防除研究施設 天敵昆虫学分野	P2-82
○	種田耕二	高知大学 自然科学系理学部門	P1-64
	田宮永吏菜	帝京科学大学	
○	辻和希	琉球大学 農学部	S, R1, P1-26, P1-33, P1-39, P2-69, G, A
	土山悠	京都産業大学 工学研究科	P2-77
○	椿宜高	京都大学 生態学研究センター	
○	坪井助仁	京都大学大学院 農学研究科	P2-15
	照屋匡	AW-IPM コンサルティング	
	堂山宗一郎	麻布大学	P1-48, P1-60
○	土畑重人	琉球大学 農学部	P1-31
○	富菜雄介	北海道大学大学院 生命科学院生命システム科学コース	P1-58
○	友永雅己	京都大学 霊長類研究所	P1-57, P1-56
○	豊田克也	東京海洋大学大学院 海洋科学研究科	P2-66
	豊原早希	帝京科学大学	
○	中里研一	理化学研究所	R1, P1-28, P1-29
○	中嶋康裕	日本大学 経済学部	R4, P2-02
○	中田兼介	東京経済大学	P2-68
○	中田幸成	同志社大学大学院 生命医科学研究科	P1-71
○	中野理枝	琉球大学 理工学研究科	P2-73
○	中野亮	農業・食品産業総合技術研究機構 果樹研究所	P2-24
	中原史生	常磐大学	P1-75
○	成田英毅	東海大学 海洋学研究科 水産学専攻	P2-09
○	西森拓	広島大学 理学研究科 数理分子生命理学専攻	R1, P1-29, P1-28, P1-52
	西山雄大	神戸大学 理学研究科 地球惑星科学専攻	P1-68

○	奴賀俊光	NPO 法人リトルターン・プロジェクト	P1-07
	野田脩平	広島大学大学院 数理分子生命理学専攻	P1-52
	野田隆史	農業生物資源研究所	
○	野間口眞太郎	佐賀大学 農学部	P1-44, P1-46
○	野間野史明	北海道大学 環境科学院	P1-09
○	長谷川愛	東京大学大学院 総合文化研究科	P1-69
○	長谷川英祐	北海道大学大学院 農学研究院生物生態・体系学分野 動物生態学研究室	R3, R5, P2-41
○	馬場成実	九州大学 生物資源環境科学府 生物的防除研究施設	P1-45, P1-76
	濱尾章二	国立科学博物館附属自然教育園	V7
	林進	鹿児島大学 教育学部	
	林奈々子	筑波大学大学院 生命環境科学研究科生物科学専攻	
○	林正幸	千葉大学大学院 園芸学研究科応用昆虫学研究室	P2-84
○	林叔克	東京農工大学工学府 情報工学科	R1
○	原口大	沖縄県病害虫防除技術センター	P2-28, P2-31, P2-27
○	原野健一	玉川大学脳科学研究所	P1-16
○	原野智広	九州大学大学院 理学研究院 生物科学部門生態科学研究室	P2-30
○	原村隆司	京都大学大学院 理学研究科 動物行動学研究室	P2-49
○	日室千尋	岡山大学大学院 環境学研究科 昆虫生態学研究室	P1-24, P1-27
○	平山寛之	九州大学	P2-75
	弘中満太郎	浜松医科大学医学部 生物学	P1-45, P1-46, P1-76
○	深川博美	鳥取県立博物館	
○	深谷緑	東京大学大学院 農学生命科学研究科 森林動物学研究室	V-3
○	福岡要	北海道大学 理学部 生物学科 (生物学)	P2-52
○	藤澤隆介	八戸工業大学 機械情報技術学科	P1-30
○	二見恭子	長崎大学熱帯医学研究所	P2-74
○	古市生	九州大学理学部 生態科学研究室	V-4, P1-22
	北條賢	琉球大学農学部亜熱帯農林環境科学科生態環境科学分野昆虫学研究室	P2-86
○	細将貴	東北大学大学院 生命科学研究科	S, R1
○	細川貴弘	産業技術総合研究所	
○	堀部直人	東京大学大学院 総合文化研究科	R1, P2-81
	本郷儀人	京都大学大学院 理学研究科 動物学教室 動物行動学研究室	P2-42
○	本間淳	総合研究大学院大学	P1-04, P2-44
○	松浦健二	岡山大学大学院 環境学研究科 昆虫生態学研究室	P1-24, P1-27, P1-25, P1-23, P1-34
	松阪崇久	関西大学 人間健康学部	P1-47
	松崎治	筑波大学大学院 生命環境科学研究科 構造生物学専攻	P1-50
○	松島俊也	北海道大学・大学院理学研究院	P1-82, P2-50, P2-51, P2-52, G
	松永孝治	独立行政法人森林総合研究所 九州育種場	
○	松本晶子	琉球大学 観光産業科学部	P2-35
○	松本有記雄	長崎大学大学院 生産科学研究科	P2-08
○	松山隆志	沖縄県農業研究センター	
○	的場知之	東京大学大学院 総合文化研究科	P1-05

	三浦一芸	近中四農研センター	P2-26, P2-78
	三浦さやか	弘前大学大学院 農学生命科学研究科	P2-58
○	三浦桃子	北海道大学 生命科学院	P1-82
○	水野聖子	岡山大学大学院 自然科学研究科生物科学専攻	P2-37
○	三谷曜子	北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター	P2-54
	峯光一	株式会社 南西環境研究所	P2-37
○	宮国泰史	鹿児島大学大学院 連合農学研究科農水圏資源環境科学専攻	P1-26
	宮澤清太	大阪大学大学院 生命機能研究科	P2-12
○	宮下直	東京大学大学院 農学生命科学研究科	S
○	向井裕美	佐賀大学大学院 農学研究科応用生物科学専攻	P1-46
	村井千寿子	玉川大学 脳科学研究所	P1-56
○	村上大賀	北海道大学 農学部昆虫体系学教室	
	村上久	神戸大学	P1-10
○	村松大輔	京都大学 理学研究科 動物学教室 動物行動学研究室	P2-01
○	村松大地	岐阜大学院 応用生物科学研究科	P1-43
○	門司麻衣子	京都大学院 理学研究科生物科学専攻動物行動学研究室	P2-22
	森哲	京都大学 理学研究科動物学教室	
○	森貴久	帝京科学大学	R4, P2-38, P1-01
	森本溪一郎	東海大学 海洋学部海洋生物学科	P2-59
○	八木議大	北海道大学農学院 生物生態・体系学講座 動物生態学研究室	R3
○	矢代敏久	岡山大学大学院 環境学研究科 昆虫生態学研究室	P1-34
	安田裕樹	大阪市立大学大学院 理学研究科	P2-10, P2-62
○	安室春彦	琉球大学大学院 理工学研究科	P2-70
	柳川厚史	社会医療法人 函館渡辺病院	
○	藪田慎司	帝京科学大学 アニマルサイエンス学科	
○	藪野惇大	長崎大学水産学部	P2-08
○	山内淳	京都大学 生態学研究センター	
○	山口幸	九州大学	P2-71
○	山口勇気	新潟大学 昆虫生態学研究室	P1-20, P1-32, P1-36
○	山根隆史	農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター 北陸研究センター	P2-29
○	山本宇彦	九州大学 生態学研究室	P2-36
○	山本千夏	クラーク株式会社	
	山本知里	長崎大学大学院	P1-01
	山本直輝	大阪市立大学大学院 理学研究科	P1-13
	山本裕之	福井工業高等専門学校	
○	山本結花	岡山大学大学院環境学研究科 昆虫生態学研究室	P1-24, P1-25
○	山脇兆史	九州大学理学研究院 生物科学部門	P2-80
○	吉川翠	東京農工大学大学院 連合農学研究科	P2-53
	吉澤樹理	岐阜大学大学院 昆虫生態学	P1-35
	吉村直也	大阪市立大学大学院 理学研究科	P2-10
	吉村友里	九州大学理学府 生態学研究室	P2-57
○	RAIHAN JAHIR	岐阜大学 連合農学研究科	P2-48
○	劉宏岳	九州大学 生物的防除研究施設 天敵昆虫学分野	P2-76

	リングホーファー萌奈美	東京大学 広域科学専攻 生命環境系	P1-11
	渡辺梓	海洋博記念公園管理財団	
	渡辺伸一	福山大学生命工学部	P1-70
	渡部宏	近畿大学農学部	P2-85
	渡邊豊	沖縄科学技術研究基盤整備機構	